

『無限階段』

ひとりでいるのが好きなのかしら
それともカッコをつけたいからか
孤独をメイクにしたいのかしら
真夜中みたいな顔にしたいのか

だけれどみんなとイッショにいると
なんだかアブクを吐いてるようで
息をしなければ 息をしなければ
それで結局ひとりになって

いつになっても登るのです
空になっても登るのです
続く限りは登るのです
答えが出るまで登りたいんです

汗がだらだら垂れるのです
なんで登るかわからない
だけれど今は登るのです
わけもわからず登ってくんです

みんなどこかに隠してるんだ
孤独なジブンを隠してるんだ
それを上手に隠したやつらが
踊り場に溜まり騒いでいるんだ

だけれどボクは歌いもせずに
次の階へと進んでいくんだ
進んだとして 進んだとして

それでいいのかわかりやしないけど

いつになっても登るのです
空がなくても登るのです
次の段差を登るのです
何かあるまで登りたいんです

今さら戻れやしないんです
もしも今から降りたとしても
何もないので仕方がない
やはりこのまま登ってくんです

いつになっても登るのです
空になっても登るのです
続く限りは登るのです
答えが出るまで登りたいんです

汗がだらだら垂れるのです
なんで登るかわからない
だけれど今は登るのです
わけもわからず登ってくんです

『CELLSIUS』

寝むれないのは暑いからだよ
得体のしれない不安じやないさ
寒いくらいに冷やしておけば
毛布の中でも何ともないでしょ

背中もびつしより汗ばむ夜は
知らない誰かとお話したい
もっと互いをさらけ出せれば
すこしは寝むたくなるかもしれない

「観測史上」も体感次第よ
湯気になっちゃうよ

ただ今の気温は何℃？

正しい数字教えてよ

世界はまるごと陽炎

何でもかんでも忘れてしまっよう

こんな暑さで外に出るのは
炙りのカラダが好きなやつらさ
それともステキなヒトをさらって
一夜の恋でもするつもりかな

パインジュースも酸っぱくなって
どうの昔にへばっているし
ひどい熱波が街を包んで
みんな茹ってしまえばいいネ

季節が過ぎれば忘れてしまうの
あくびも出るしね

ただ今の気温は何℃？

正しい記録伝えてよ

世界はまるごと陽炎

何でもかんでも歪んでしまっよう

ひどい言葉を吐き出したいな
狙いを決めずに吐き出したいな
それで見つかり逮捕されても

「暑かったから」で済まされなかな

派手な景色や文字じゃなければ

鳥肌すらも立たないなんて

やっぱり今年の夏はまさしく

「イジヨーキショー」になっているのね

信号の色も熱してしまえば

ゼンプ「生まれ」かな

ただ今の気温は何℃？

ホントの目盛り教えてよ

世界はまるごと陽炎

セイギなことなど忘れてしまっよう

『ファミリア』

ボクのパパは激辛パスタ
ボクママは新型マイク
アナタドナタ 名前は何だ
どれもこれも眩しすぎるわ

ボクの兄は「月に百万」
ボクの姉は「激安特価」
くるりくるり替わりすぎるわ
今はアイス食べていたいな

どうしてそんなにそばにいたいのか
家族がいいのか 隣がいいのか

四畳半の部屋にはファミリア

画面ごしに煩わしいや

バツを押さなければ「こんにちは」

たまにはひとりでいたいのに

ボクのパパは適性検査

ボクママは恋人占い

ボクはどこの子なんだ？

どこがボクの居場所なんだ？

ボクの兄はデジタル世紀

ボクの姉はSDGs

なんじゃもんじゃ 革命かしら

あす
明日になれば涼しいかしら

どうしてそんなにそばにいたいのか
何にも見てない 何にもないない

四畳半の部屋にはファミリア

あちらこちらがやかましいわ

バツを押さなければオシオキだ

寝る時くらいはお静かに

どうしてそんなにそばにいたいのか

家族がいいのか 隣がいいのか

どうしてそんなにそばにいたいのか

家族はコリゴリ 家族はさよなら

四畳半の部屋にはファミリア

画面こしに煩わしいや

バツを押さなければ「こんにちは」

たまにはひとりでいたいのに

四畳半の部屋にはファミリア

あちらこちらがやかましいわ

バツを押さなければオシオキだ

寝る時くらいはお静かに

『メキシカン』

今年も鋭い暑さが降ってくる

チクチク刺さってタイルに砕け散る

彼女はプールの隣で寝転んで

一昨日くらいのニュースを読んでいる

彼が何度も彼女を呼ぶけれど

聞こえないふりでタコスを食べている

そしてそのまま夜になったなら

ベッドの上で飛沫が立つだろう

それはまるでメキシカン

夏の終わりのメキシカン

台詞回しもエキゾチック

レモン色したアイロニー

それはまるでメキシカン

ヒリつくようなメキシカン

愛がこすれてく DAY TIME

いっそう深い NIGHT TIME

背中を曲げた湾岸高速を

サイレン鳴らし車が走り去る

「きつと貴方を捕まえに来たのよ」

軽口とティアモのクリスタル

白いローブで夕陽の窓に立ち

赤をバックにはらりと脱ぎ落とす

彼はテキーラのグラスを傾け

白い背中を優しく撫でてやる

それはまるでメキシカン

夏の終わりのメキシカン

台詞回しもエキゾチック

レモン色したアイロニー

それはまるでメキシカン

ヒリつくようなメキシカン

愛がこすれてく DAY TIME

いっそう深い NIGHT TIME

ホテルの前にはパトカーが集まり

部屋の扉を何度もノックする

何も知らずに二人は抱き合って

出逢った頃の景色を夢に見る

それはまるでメキシカン

夏の終わりのメキシカン

眠り続ける二人と

それを囲む人たちと

それはまるでメキシカン

引き裂かれてもメキシカン

カーテンが揺らめく部屋

サーチライトの真夜中

『オン・ザ・ロード』

空っぽのままのリュックサック
汗でびしょぬれの白いシャツ
古い地図なんか破ったし
どこへも行っていない

お腹がすいたらどつかで
パンでも買って海に行こう
夜がきてさみしくなったら
ひどい歌をうたおう

恋しいとか懐かしいとか
そんな言葉になるまえの苦さが
今の気持ちなんだ

散々蹴つ飛ばされた心が
ペダルを踏み込んだ
踊るように 転がるように
朝陽も回ってんだ

I know, human's life is on the road
無様に転んでなお
踊るように 転がるように
明日を見に行くんだ

脂汗、カルピス、リンドバーグ
隣を追い越すは軽トラック
足の裏の痛みなんでもう
何も感じないよ

早朝、無人の交差点
赤信号でも突っ切ろう
最初からイイコじゃないから
何だってできる

おかしいとか 嘘つきだとか
そんな言葉を押し付けてきたのは
あんたのほうじゃないか

ガンガン頭を叩く痛みから
ここまで逃げてきた
焦るように 追われるように
今でも走ってんだ

I know, human's life is on the road
ぐじゃぐじゃの膝さえも
かばうように かかえるように
街を駆けて抜ける

傷ひとつもないこの身体が
不安にさせるから
ぶつけて ぶつけて ぶつけて
そこに夕暮れの風

名前も知らない街や港へ
いくつも手を振って
さよなら さよなら さよなら
そして朝が巡る

散々蹴つ飛ばされた心が
ペダルを踏み込んだ
踊るように 転がるように
朝陽も回ってんだ

I know, human's life is on the road
無様に転んでなお
踊るように 転がるように
明日を見に行くんだ

『ワダツミ』

さあ両目をこすって窓を開けて
見えるよ、青空の向こうまで

さあ靴紐を結って荷物を背負^{しょ}って

真夏の陽の光へと手を伸ばしてみよう

追いかけたものが蜃気楼でも

儚い夏の夢だとしても

胸の奥まで楽しめたなら

海風浴びて今走りだせ

響くワダツミの笑い声

叫べ、限りある夏の日々に

こだまする 反射する

数えていこう ひとつずつ

ねえ、あの蒼い海に果てはあるのかな

行こうよ 不格好な船出して

もし僕らそこに辿り着いたなら

写真はいらないよね 目に焼き付けてこう

夢見たものがばからしくても

叶うわけないものだとしても

それさえ強く抱きしめて

ああ

海風浴びて今すべりこめ

響けワダツミの奥底まで

叫べ、加速する夏の日々に
飛散する 砂になる
いざ行こう、力込め

いつかこの瞬きが過去になっても

砂浜に残さずなぞれるかな

海の蒼 雲の白

大切に仕舞いこんで

海風浴びて今走りだせ

響くワダツミの笑い声

叫べ、限りある夏の日々に

こだまする 反射する

数えていこう ひとつずつ

『MORNING』

あからさまに疲れた表情

「きみを助けたい」無謀な構想

くたびれた顔した高層ビル

きつとこのままじゃ干からびる

いつも理想のジブんに追われてる

走り続けて息が乱れてる

ねえ、今日くらい休みなよ

街角の小さいカフェテラスで

朝ごはんを食べに行こうよ

お月さまをフライパンで焼いて

ナイフをすべり込ませれば

半熟の今日があふれ出すよ

せつかくの朝なんだから

なみだ雨はハンカチで拭いて

深く深く息を吐いたら

街はやがて光のなかさ

深夜だつてのに灯りは煌々

「わたしのこと、気にしないでいいよ」

窓の外で響いたサイレン

そして暗闇 やってくる SILENCE

きみはもう充分がんばってる

きみからの愛 受け取ってる

ねえ、もう遅いし寝むりなよ

明日は港のカフ エテラスで

朝ごはんを食べに行こうよ
夜の闇にミルクを溶かして
あつあつのまま啜ったなら
冷えたところ やわらいでいくよ

せつかくの朝なんだから
昨日の靄 朝露とともに
ふんわりと空に昇ったら
海の上を雲が流れてく

重たくて暗い夜のとばり
隙間をくぐって歩いてく
きみの震える背中さすり
冷たい路地を渡ってく

やがて見えてくる船の帰り
朝焼けを積んで泳いでる
思いつめるのこれで終わり
ふらりとふたりで歩いてく

朝ごはんを食べに行こうよ
お月さまをフライパンで焼いて
ナイフをすべり込ませれば
半熟の今日があふれ出すよ

せつかくの朝なんだから
なみだ雨はハンカチで拭いて
深く深く息を吐いたら

街はやがて光のなかさ

『汐風うるうる』

さみしい夜に空が雨を降らせて
朝方ようやく泣き止んだ
眠りの港町 ミドリ鳥の群れ
海に浮かんでる商店街

やさしいきみの家に電車が着いて
遠くの場所へと連れていく
今ではひとりきり ぼくだけひとりきり
ベランダ越しに水化粧

港の風が世界をふるわせるのなら
ほくも夜明けの大きになつて
うるうる うるうる うるうるしたい

みんなの前で笑うと恥ずかしい
だから街の片隅 神社の陰で
うるうる うるうる うるうるしたい

寝れない頃にいつも外に出ては
素敵なラジオを聴いていた
遠くの国の歌 音符のないメロディ
飛行機混じりの星の空

とうの昔に本が消えた本屋で
素敵になったきみに会えた
レジに腰を掛けて しずかなキスをして
そのとき霧宙が鳴りました

港の風が世界をふるわせるのなら
ほくもネオンのブルーになって

うるうる うるうる うるうるしたい

ダンスをするならひとり踊りたい
だから路地の片隅 静かなBARで
うるうる うるうる うるうるしたい

湿った場所から小さな葉っぱが出るのなら
ほくも浜辺の花壇になって
うるうる うるうる うるうるしよう

港の風が世界をふるわせるのなら
ほくも夜明けの気分になって
うるうる うるうる うるうるしたい

みんなの前で笑うと恥ずかしい
だから街の片隅 神社の陰で
うるうる うるうる うるうるしたい

『魔法の世界』

救え切れない数の風船をつけて
夢と希望をふくらませ

救助ヘリに向け笑ったあの人は
海を越えていけたかな

赤と青の絵の具 絵筆に込めて
こころの内を描き上げ
ギターの電圧で痺れたあの人は
どんな景色を描くのかな

すべてはMAGIC・WORLD
素敵なMAGIC・WORLD
あなたを探しています
ここではない場所で

砂の飛沫と鉄の霧雨の中で
何度もカメラに目を合わせ
地雷を踏みぬいて 砕けたあの人は
「ハイワ」の写真を撮れたかな

まじめなはずの顔を真っ白にして
ピエロのメイクで飾り付け
綱渡りの途中 転げたあの人は
どんな笑顔でいるのかな

すべてはMAGIC・WORLD
素敵なMAGIC・WORLD
あなたを探しています

ここではない場所で

黒いペンキ塗ったプラカード上げて
前に後ろに流されて
押されて潰されてひしゃげたあの人は
どんな正義を語るかな

愛も夢も日々も何も忘れ
過去も明日も閉ざされて
ベランダに出たあと泣いたあの人は
楽しい夢を見れたかな

すべてはMAGIC・WORLD
素敵なMAGIC・WORLD
あなたを探しています
ここではない場所で